

京都・同志社の加藤延年氏の貝類コレクション —その由来・保管の変遷・活用—

黒住耐二

千葉県立中央博物館
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2
E-mail: t.krzm@pref.chiba.lg.jp

(2022年9月29日投稿；12月30日改訂；2023年1月16日受理)

要旨 近代に当時の日本国内から幅広く収集され、日本貝類学の基本をなす平瀬貝類コレクションの一部が、京都の私学・同志社に、加藤コレクションとして存在していることを報告した。そして、その由来・保管の変遷・活用等に関して考察した。

キーワード：同志社，加藤延年，平瀬貝類コレクション，理振法

明治期から大正期に収集された日本貝類学の基本をなす平瀬貝類コレクション（以下、平瀬コレクション）の一部が京都の私学・同志社に加藤コレクションとして存在していることは、広くは知られていない。しかし、同志社の様々な記事中に述べられているように、加藤コレクションは同志社の教員であった加藤延年氏が収集した哺乳類・鳥類・貝類等の約8000点からなる動物標本コレクションである（玉松, 1968, 2014; 田邊, 2015）。学校に保管されている“学校標本”にはこのような貴重な例も数多く存在している。

本稿では、近代の西洋科学導入後に形成された超一級の自然史資料である平瀬コレクションを考える一端として、加藤コレクション中の貝類標本群（以下、加藤延年貝類コレクション）の由来・保管の変遷・活用について、文献資料を基に論じる。なお、本稿脱稿後に、和田（2022）が加藤コレクションとは明記していないものの、同志社中学校・高等学校の平瀬コレクションの一部を图示した報文が出版された。これが加藤延年貝類コレクションの内容を僅かにでも示した唯一のものと考えられる。

方法

主に貝類学と同志社に関係する様々な文献を調査し、加藤コレクションに関連するものを探し出した。同時に、インターネットも併用して、加藤コレクション関連の文献を検索し、可能な限り、原資料を確認した。

結果および考察

1 平瀬コレクションの概要と平瀬貝類博物館閉館後のコレクションの分割

平瀬コレクションは、京都在住であった平瀬與一郎氏が明治時代末から私財を投じて収集した日本の近代を代表する貝類コレクションである。その内容は当時入手できうる大日本帝国（千島・日本・琉球の各列島および朝鮮半島・台湾）の海産・淡水産・陸産の約3000種のみならず、国外産4500種が収集されていたとされる（金丸, 1953a）。

この貝類コレクションをもとに私設の平瀬貝類博物館が1913年（大正2年）に開館したものの、入館者数の減少によって1919年（大正8年）に閉鎖された。その後、平瀬コレクションは平瀬家・東京帝室博物館・スミソニアン博物館に3分割され（以降、これを「主要3分割」と表記する）、残りをいくつかのセットにして各所に配分されたこと（以降、主要3分割以外の閉館時の平瀬コレクションを「残余分割コレクション」と表記）が知られている（表1）。平瀬コレクションの残余分割コレクションの全取蔵先を明らかにした研究はないものの、奈良・天理高等学校の江原眞伍博士旧蔵貝類標本目録には、残余分割コレクションは京都大学三高等に10分割されたと記されている（平木, 1973）。また、金丸（1953a）は、この残余分割に関して「その餘も出来得る限り国内官公私の希望者に譲渡」と記している。

残余分割のうち、リストがわかりやすい形で公開されているものは、奈良・天理高等学校のもの（岩下, 1973）のみであり、筆者は現在、様々な貝類コレクション中の平瀬氏の貝類収集・販売・出版および展示等を行った「平瀬介館」の標本ラベルを調査・検討してお

表1. 平瀬貝類博物館閉館後のコレクションの分割 (暫定).

コレクション名 (暫定)	主な途中の収蔵機関等	主な現在の収蔵機関	主要依拠文献
主要3分割コレクション			
平瀬家/平瀬信太郎氏	三井家→資源科学研究所→(被災・焼失)→[陸貝等の一部]横浜国立大学・鹿間時夫氏	横須賀市自然博物館 [自然・人文博物館]	平瀬・瀧 (1951) ; 金丸 (1953a, 1956/陳列標本) ; 田原・蟹江 (1983) ; カロモン・多田 (2006)
東京帝室博物館 [東京科学博物館/帝室博物館]	東京博物館/東京科学博物館	国立科学博物館	金丸 (1953a) ; 平木 (1973) ; 船水 (1983) ; カロモン・多田 (2006)
スミソニアン博物館 [米国立博物館]		スミソニアン博物館	金丸 (1953a) ; 平木 (1973) ; 船水 (1983) ; カロモン・多田 (2006)
残余分割コレクション (10分割: 平木, 1973)			
加藤延年貝類コレクション	同志社/博物館→醇化館	同志社/吉峰館	玉松 (1968, 2014) ; 無記名 (2014)
江原眞伍博士旧蔵コレクション	江原眞伍氏	天理高等学校	平木 (1973)
京大旧三高コレクション	京大教養部	京都大学総合博物館	平木 (1973) ; カロモン (2017)
京大動物学教室コレクション		京都大学総合博物館	カロモン (2017)
京大地質学鉱物学教室コレクション		京都大学総合博物館	カロモン (2017)
[未確認]	函館図書館標本室→?市立函館博物館	?北海道大学総合博物館	船水 (1983) ; 尾崎 (1993) ; 安田 (2011)

り、残余分割コレクションの研究を進展させるために暫定的に示した表1を作成した。同時に、この内容等を明らかにする調査を継続中である。なお、平瀬コレクションは、平瀬貝類博物館閉館前から開館中も標本販売を行っており、残余分割コレクション以外にも「平瀬介館」の標本ラベルを有する標本群は日本各地の博物館に存在している。表1に示した文献に基づいて、これらの標本群は残余分割コレクションとは取り扱わなかった。

近年、カロモン・多田 (2006) により、書簡の分析等による科学的な視点からの平瀬コレクションの研究があり、カロモン (2017) により、ラベルの筆跡等のさらなる調査の方向性が示唆されている。

最初に記したように、京都の私学・同志社に、平瀬コレクションの一部が加藤延年貝類コレクションとして存在しているものの、その存在はわずかに吉良 (1954) が当時、同志社大学の考古学の教授であった酒詰伸男 (筆名: 土岐伸雄) 氏からの私信として、「黒田先生のご依頼で、[加藤] 先生のご遺品の所在をたしかめたところ同志社高校 (京都岩倉在) 博物館に保存されている由で安心しました」と記している程度で、多くの貝類研究者等にはほとんど知られていなかった。ただ、ごく最近、和田 (2022) は平瀬コレクションが同志社中学校・高等学校に存在し、平瀬介館のラベルも含めいくつかの標本を図示した。ここでは、まず、加藤延年貝類コレクションが平瀬コレクションの残余分割コレクションであることと、どのような由来を経て同志社に入ったのかを検討する。

2 由来

加藤延年氏は、同志社を卒業され、その後熊本英学校を経て、同志社の博物学教師となり、資料購入費が不足する中、博物資料の収集に尽力されたようである (加藤, 1935; 玉松, 1968, 2014; 田邊, 2015)。そして、貝類収集を開始した平瀬與一郎と懇意になり、平瀬介館の事業に深く関与するようになった (例えば金丸, 1957)。その経緯もあり、平瀬貝類博物館閉館後に、そのコレクションの一部を譲り受けたとされる (玉松, 1968)。つまり、同志社の加藤延年貝類コレクションは、様々な時

期に渡って個別に購入や分与されたものの集合体ではなく、平瀬コレクションの残余分割の一つであると考えられる。加藤延年貝類コレクションは6000点以上と記されており (玉松, 1968)、確実な残余分割コレクションの一つ、天理高等学校の江原眞伍博士旧蔵コレクションは約1800種 (≒ロット) であり (岩下, 1973)、仮に1ロットを3個体とすると5400個体となり、およそ同数である。このことも、加藤延年貝類コレクションが残余分割の一つであることの証左の一つと考えている。そして、両コレクションで類似した個体数であることから、今後、残余分割コレクションの確認を行う場合の一つの目安となる。ただ、加藤延年貝類コレクションには3種類の平瀬コレクションのラベルが図示されているものの、京都大学総合博物の3点は同一様式のラベルであり (和田, 2022)、国立科学博物館の平瀬コレクションの図示された2点のラベルは同じタイプとなっており (石本・奥谷, 2017)、同志社のものとは異なっている。このことから、多種類のラベルからなる加藤延年貝類コレクションは残余分割コレクションではない可能性や約6000個体が目安とはいえないということも考えられる。しかし、主要3分割コレクションとされる横須賀市自然・人文博物館等のラベルも必ずしも同一ではなかった例もあり、研究の初期段階として、上記を目安と考えておきたい。むしろ重要なことは、各平瀬コレクションのわかる範囲での由来の明記とラベルタイプを含めたカタログ化を行うことであり、これによって残余分割コレクションを含めた研究の進展が期待できよう。

この加藤延年貝類コレクションの入手方法が有償なのか、無償なのかは、知りえた文献中に明記されているものはなかった。加藤 (1935) は、同志社の60周年記念誌で、哺乳類・鳥類を中心に各標本の入手経過等を比較的詳細に述べているものの、なぜか貝類コレクションに関しては一切触れられていない。ただ、この中には、標本購入費用はかなり少なかったことが記されており、加藤氏と平瀬氏の極めて親密な関係から、筆者は、無償で入手されたものではないかと考えている。なお、上記のように加藤コレクションにはトキ等の現在では希少・入手困難な哺乳類・鳥類が多く含まれており、この加藤

(1935) の記述はそれぞれの標本の由来を明記したものとして極めて貴重だと思われる。

また、カロモン (2017) は、平瀬による貝類学の進展に英語が大きく関与し、『秘訣は英語であった。』と記している。平瀬與一郎は多くの英語圏の人々と交流があり、そこから英語能力を高めた可能性があるものの、直接的に英語圏の人々と接していたのは、“丁稚”として平瀬介館の貝類関係の実務を担っていたのは黒田徳米先生のようなものである (東, 1987, p. 88)。むしろ黒田先生の英語対応の時に、平瀬介館に顧問格で関わり、英学校の教師もされていた加藤延年氏がなんらかの補助をしていた可能性も想像される。

3 保管の変遷

加藤延年貝類コレクションは、当初、京都市の中心部・上京区今出川にあった同志社博物室に保管されていたが、太平洋戦争中は図書館に移動となり、1950年には左京区岩倉の醇化館 (じゅんかかん) に保管されたという (玉松, 1968)。なお、醇化館に関しては、玉松 (1968) とほぼ同様な内容が、「同志社標本館 (醇化館) 案内」として、インターネットでのみ閲覧でき (紙媒体なし: 同志社大学図書館による)、著者の玉松公叙氏は、加藤延年氏の弟子と記されており、記述内容の精度はかなり高いものと考えられる。また、この記事では醇化館は2011年2月に、閉鎖・解体されたことが記されている。

同志社中高 [校] の沿革 (ウェブサイト閲覧) によると、この醇化館は、「2011(平成23) 醇化館 (標本館) 解体 (標本は吉峰館「大学」へ移管)」とある。吉峰館は、現在、同志社小学校の第二体育館ともいべき建物で、加藤コレクションが展示収納されている標本館が併設されているという (無記名, 2014)。ただ2018年10月のウェブサイト閲覧の記述とは異なり、現在は貝類を含む加藤コレクションは同志社高校の理科館「万象館」に収納されているという (玉井・N-cube編集部, 2016)。なお、筆者も中学生の頃 (1970年代前半)、父親が同校の出身であったこともあり、京都岩倉で加藤コレクション

の貝類標本を見たという記憶はあるものの、詳細に関する記憶は残念ながら一切なく、悔やまれる。

4 活用

ここでは、加藤コレクションの利用に関して、いくつかの視点から述べる。

4-1 本コレクションの学校教育活用例とその変化

本コレクションの最大の目的は、生徒に実物の標本を示し、生物の多様性を認識させることにあった (加藤, 1935)。ただ、昭和10年代に同校に在籍した父親から筆者が聞いた話では、“理科室にハチドリの剥製のあることを垣間見て、その小ささと美麗さに驚いた。しかし、授業で見ることはなかった”ということであった。このことは、特段、本コレクションだけのことではなく、どのように授業に用いるか、あるいは生徒に見せるかという教師の側の問題である。

そして、玉松 (1968) によると、学内授業での利用だけではなく、毎年の文化祭で一般公開し、以前には市立中学校の卒業時の団体見学を含め、市内の小・中・高校の生徒の見学もあったという。このように、1970年頃までは、“博物標本を生徒に実見させ、生物の多様性を理解させよう”という意識をお持ちの先生方も多かったと思われる (松本・北浦, 1999も参照)。筆者は1953年に制定された理科教育振興法 (Science Education Promotion Act; 以下、理振法) によって1957年に購入された貝類標本を見る機会があった (図1)。その標本は、木箱中の紙箱に1種ずつ収納されており、名前と分布を記したラベル付きのものであり、ある種伝統的な形態だと言える。この年代までは、博物標本を利用しようという意識も大きかったことを示していよう (黒住, 2021も参照)。

平成期に入ってから、加藤コレクションは時に新聞でも紹介され (朝日新聞, 2007)、加藤コレクションの一部の標本は、多様性生物希少標本ネットワーク等でも紹介されているようである (例えば田邊, 2015)。ただ、常時の一般公開はなく、2018年秋に加藤延年貝類コレク



図1. 理振法により1957年に購入された貝類標本。千葉県立千葉高校2018年9月14日撮影。

ションの閲覧を申し込んだが、博物館学芸員の個人研究では見る事ができなかった。

もちろん、現在でも加藤コレクションは授業やクラブ活動で活用されているようである（無記名, 2014）。最近の理科教育における傾向は学習指導要領に基づく“観察から実験／結果の重視”という方向に変わったと思われる。同志社においても小学校の理科教育で加藤コレクションについては触れられていない（川崎, 2014）。この状況は、近年大きく変化しているようである。玉井・N-cube編集部（2016）によると、加藤コレクションは、「同志社中学校の生徒たちは中1・理科の授業で生物分野を学ぶ折り、この標本館を利用して研究活動を行い、3学期には成果を発表する場が設けられている」とのことであり、学校標本の利用例として注目されよう。

また、理振法においても、現在、化石標本は販売されているものの貝類等の生物標本の販売例を見つけ出すことはできなかった。加藤コレクションの上記の利用を含め、今後日本の理科教育において、再度、観察重視・標本から多様性を認識させるという機会の増加することが望まれる。また今後、理振法における標本販売に関しても標本重視の変遷を示すデータとして議論することを考えている。

4-2 過去の生息を示す標本

これまで、近代の標本やデータは、ある種が現在、特定の地域から消滅あるいは激減したことを確実に示す証拠として取り上げられ（例えば黒住, 2003）、生物多様性の理解に大きく寄与してきた。この加藤延年貝類コレクションでも同様な利用が考えられる。ただ、平瀬コレクションのデータは、かなり広く知られており（例えば Hirase, 1903; 平瀬, 1910; 岩下, 1973）、本コレクションで“新たな発見”は僅かかもしれない。

4-3 過去の環境を内包する貝類標本

貝類は基本的には炭酸カルシウムからなる貝殻を有しているが、その中には微量な元素も様々に取り込まれている。貝殻に含まれる各種元素の値を測定することによって、ある地域の環境の変化を示すことが可能である。平瀬コレクションは明治末から大正前半の20世紀初頭に生きた個体を中心に採集されていることがわかっている。岩下（1973）に示されているように、平瀬コレクションのラベルには、「山城」等の旧国名のみが記されていることが通常である。ただ、新種記載に関しては、もう少し詳細な地名が示されていたり（例えば、山城京都）、時にはこの詳細な地名の入ったラベルも存在することを別のコレクションで確認することができた。また、もしかすると公開されたことはないと思われるが、平瀬コレクションの様々なリストが残存しており、その中には地名も記されているかもしれない。また、貝類各種は内湾、干潟、泥底というように様々な環境に生息しており、多様な環境の解析も行うことができる。

このようなことから、今後、近代から現代にかけての

各地域の個別の環境の変遷を微量元素の変化から検討していく研究の素材として、貝類標本は優れているものと考えられる。この研究素材としても、平瀬コレクションの一部である本コレクションは重要であり、また活用される可能性が考えられる。

4-4 「天然記念物」や「自然史財」としての保管・活用

東日本大震災で貴重な自然史標本の消失が生じたことも大きな契機となり、重要自然史標本を「自然史財」として有識者により認定し、各地の博物館で保管し、最終的には文化財保護法のような法で護れるようにすべきだという提言がなされている（日本学術会議, 2017）。筆者も当然、重要な自然史標本は確実に継承すべきであるという点には大いに賛成する。そして、今回の加藤コレクションは、貝類のみならず、コレクション全体として、このような対象となるものと考えられる。

しかし、この提言にある、ア）有識者による認定、イ）基本的に地方博物館での保管・管理に関しては疑問を持つ。特に、イ）に関しては、玉松（1968）でも同志社の例が記されているように、現在の地方博物館では学芸員は様々な業務で余裕がないのが現状であり、もし法が成立しても人員増は望めそうになく、保管・管理は困難なことも多いと想定される。

むしろ、充実してきている国立の博物館や大学での最初の保管・活用の方向性を目指すべきだと考えられる。一部の機関では、例えばタイプ標本の公開を進展させているが、多くのところでは、希少生物の情報等の自然史財の目指す指標も行われていないように感じる。地方の博物館に在籍していて、むしろ問題なのは、現在の大学教育で「自らの手で、標本を集め、作成し、管理でき、標本の重要性を認識できる学生の育成」が極めて弱いのではないかと感じている点である。この点が最重要の課題ではないだろうか。

また自然史財の提言（日本学術会議, 2017）では、「天然記念物」を含む現行の文化財保護法での自然史財の保管も検討されているが、対象の範囲や標本貸し出しの問題等で、文化財保護法では難しいと結論されている。筆者も、その通りではあると認識するが、加藤コレクションのように、a) 近代という時間の経っていること、b) 新たな標本の追加がないこと、c) 日本の広範囲な地域から収集されていること等、当然、内容は十分に重要と考えられること等から、むしろ文化財保護法の枠内での保管を想定した対応の方が良いように考える。もちろん、現行の文化財保護法では、上述した“破壊を伴う貝殻中の元素分析”等を行うことは不可能に近いであろう。しかし、文化庁が“文化財の公開・活用”に大きく舵を切った現状では、むしろ、有識者の側がこのような新たな活用とその指針を示していくべきだと考える。上述の標本を扱える次世代の育成とも関連するが、自然史系の大学の有識者による文化財保護法の天然記念物の“事務仕事”を行うことの専門性をより喚起し、専門職として行政にどれだけの卒業生を就職させているのか、

同じ文化財保護法下にある埋蔵文化財系の大学教員等の努力と比較して大きな開きがあるように感じている。

いずれにしても、貝類を含む加藤コレクションは、天然記念物や自然史財等に該当する極めて貴重なコレクションであると筆者は思っている。今後も、困難な場面を乗り越えてこられたように、同志社における保管が続くことを願っている。

4-5 近代における手工業等の推定の素材

今回、実見することは叶わなかったが、上述の由来・変遷の検討から、加藤延年貝類コレクションは当時のまま引き継がれている可能性も十分に想定される（和田，2022も参照）。平瀬コレクションの収集については、日本各地で貝類を採集するために派遣された採集人に関するいくつもの記述があり、平瀬家から資金の出ている“職業としての貝類採集”であったことがわかる（例えば黒田，1907）。また、平瀬介館は貝類標本の国内外での販売も行っていた（例えばHirase, 1903; 平瀬，1910）。

そして、標本の収納・展示・輸送等に関しては、大量の管瓶（ガラス棒ビン）・ラベル等が必要であり、これらは京都市内のいくつもの手工業者に発注していたものと考えられる。

これらの標本に付随したガラスや紙箱は、当然、近代のものであり、その材料の分析等も興味ある研究課題であると筆者には思われる。福岡（2013, pp. 102-105）も、同様な視点を紹介している。もちろん、その原材料の入手方法や価格等も経済活動として調査されるべきものであろう。そして、多くの自治体誌の“生業／職業”の分析で、このような“博物資料に関する項目”が明示され

ることはほぼなく、今後コレクションの分析を通して、極めて大きな経済的・社会的活動を有しない“手工業”的な活動に関しても、当時の市井の人々の具体的な生活を明らかにするという新たな視点を提供するものだと思うられる。

明治時代になり学習教材としての“博物標本”が必要となり（椎名，1989, p. 220）、沖縄の貝類に関してはサンゴ礁の大形貝類の採集・販売という利用を指摘してきた（黒住，2014, p. 66）。平瀬介館の標本販売の目的は私的なものであったが、当時の博物標本販売と類似した行為でもあった。この博物標本販売に関しては、東京の動物標本社が先行していたようであるが、京都では島津製作所が担っていくことになる（図2）。前述の管瓶や紙箱も、もしかすると、京都全体としては、ある程度の数の下請け手工業者が存在していたことも想定される。

このような検討を行う上で、加藤延年貝類コレクションは極めて興味深いものだと考えられる。

5 終わりに

今回は学校標本の一例として、同志社に残された加藤延年貝類コレクションに関して、その由来・保管・活用について述べた。このコレクションは、日本の近代を代表する平瀬コレクションが平瀬貝類博物館の事業終了後に3分割されたもののうち、さらに10分割された「残余分割コレクション」の一つであると考えた。平瀬氏と親交の深かった加藤氏が、児童・生徒への学習教材としての目的で入手されたものである。太平洋戦争を挟み、組織の変更がありながらも、同志社内部で貝類を含む加藤コレクションが保管されてきた努力には敬意を払いた

刊 創 祝

<p style="font-size: 2em;">+</p> <p>株式 會社</p> <p style="font-size: 1.5em; font-weight: bold;">島津製作所標本 部</p> <p>京都市河原町二條南</p>	<p>子安貝切斷</p> <p>三〇〇〇</p>	<p>蝸牛解型(成漬)</p> <p>七〇〇〇</p>	<p>蝸牛解型(成漬)</p> <p>一〇〇〇</p>	<p>食田蝸牛(成漬)</p> <p>三〇〇〇</p>	<p>4ヶ解型(成漬)</p> <p>八〇〇〇</p>	<p>4ヶ解型(成漬)</p> <p>三三〇〇</p>	<p>アンモン貝化石</p> <p>三三〇〇</p>	<p>アラスタガヒ解型(成漬)</p> <p>一〇〇〇</p>	<p>アラスタガヒ解型(成漬)</p> <p>六〇〇</p>	<p>アラスタガヒ解型(成漬)</p> <p>三三〇〇</p>	<p>スビルラ貝殻</p> <p>三〇〇〇</p>
--	--------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	----------------------------	---------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	---------------------------

液 浸 ¥ 10.00
貝 殻 本 ¥ 2.00
目 録 本 ¥ 1.00

Argonauta argo LINNAEUS. (アフリガヒ)

Gaudryceras striatum JIMBO. 化石 ¥ 2.00

Argonauta liani SOLANDER. (タコブネ) 貝 殻 ¥ 1.00

+

株式
會社 島津製作所標本
部

京都市河原町二條南

図2. 島津製作所の貝類標本販売の広告。左：Venus 1巻1号裏表紙（1923年）、右：Venus 1巻2号裏表紙（1923年）。

て氏の名譽を紀念するため右和名を附す」と記している。

(2) カトウシタダミ (黒田 in 吉良, 1947) *Archiminolia katoi* (Kuroda & Habe in Habe, 1961): ヒカリシタダミ科

和名・学名とも加藤氏に献名された。正式な新種記載は、和名新称の後であり、タイプ産地は、高知県足摺岬沖(水深200-300m)である。

6-4 加藤氏が提唱した和名

今回、一次文献を探し出せなかったため、岡本・奥谷(1997)に基づいて示した。もしかすると、他の研究者が和名を使われ、一次文献が存在しない可能性もある。

(1) キナレイシ [黄な荔枝] *Mancinella alouina* (Röding, 1798): アッキガイ科

ニガウリ(ごーや)は植物のツルレイシの果実で、植物の果実でイボ状の突起を持つ形態に類似しているところから、貝類のレイシの和名が付けられた。レイシの仲間、橙黄色の本種に対して、九州柳川出身の加藤氏の発案で、九州では黄色を「きな」と言うところから“黄色のレイシ”ということで、キナレイシとなったとされる。

(2) ビノスガイ [美之主貝] *Securella stimpsoni* (Gould, 1861): マルスダレガイ科

この種は、以前、*Venus*属に入れられており、ビーナス(≡女神)に対して、美之主貝と加藤氏が漢字を当てられたとされる。見事な当て字ではあるが、白く、ハマグリ型で、極めて“普通の貝”からは、ビーナスは全く連想できない。

謝辞

本報告は平成30年度全国科学博物館活動等助成事業「学校に収蔵されている自然誌標本および調査記録の調査、保存と活用」および「学校に収蔵された標本類を通した博学連携」(JSPS科研費19K01147)の両成果(代表:齋木健一)であり、原稿に目を通していただいた齋木健一博士および文献調査でお世話になった同志社大学今出川図書館の方々、平瀬コレクションの閲覧でお世話になった横須賀市自然・人文博物館の萩原清司氏、京都大学における平瀬コレクションに関して有益な情報をお教えいただいた下稲葉さやか氏、極めて重要な指摘および追加文献のご教示をいただいた1名を含め3名の査読者に記してお礼申し上げます。

引用文献

無記名. 2014. 建物案内. 吉峰館(同志社小学校). 同経会報(137): 63.
朝日新聞. 2007. お宝★発見 動物標本8000点 同志社大(2007年8月24日) <https://www.asahi.com/edu/university/otakara/TKY200708230215.html>(最終閲覧日: 2018/10/9)
カロモン ポール. 2017. 総合博物館コレクション研究〈1〉平瀬貝類標本. 京都大学総合博物館ニュースレター(41): 8-9.
カロモン ポール・多田 昭. 2006. 平瀬興一郎ならびに彼の日本貝

類学における役割. 西宮市貝類館研究報告(4): 30+22+16 pls.
同志社中高[校]の沿革. <https://www.js.doshisha.ac.jp/high/About-Doshisha/our-history.html>(最終閲覧日: 2018/10/9)
同志社標本館(醇化館)案内 <https://www.js.doshisha.ac.jp/high/Galleries/arc/arc/Jyunkakan.html>(最終閲覧日: 2018/10/9)
福岡優子(編). 2013. 標本の本—京都大学総合博物館の収蔵庫から. 169 pp. 青幻舎, 京都.
船水 清. 1983. 岩川友太郎伝. 281 pp. 岩川友太郎伝刊行会, 青森.
東 薫. 1987. 貝に魅せられた一生—黒田徳米ものがたり. 271 pp. 黒田徳米ものがたり刊行会, 兵庫.
平木一雄. 1973. 由来の記. 所収 岩下典弘(編), 江原真伍博士旧蔵貝類標本目録, pp. 2-3. 天理高等学校, 奈良.
平瀬信太郎・瀧 庸. 1951. 天然色写真版 日本貝類図鑑 日本列島及其の附近産. xxvii+134 pls.+46 pp. 文教閣, 東京.
Hirase, Y. 1903. Catalogue of Land Shells of Japan. 24 pp.+ 1 pl. Published by the author.
平瀬興一郎. 1907. 介類雑誌発行の主旨. 介類雑誌 1(1): 1-3.
平瀬興一郎. 1909. 日本陸産貝類図説(16). 介類雑誌 3(1): 13-18, 図版23.
平瀬興一郎. 1910. 日本千貝目録. 48+9 pp.+ 1 pl. 平瀬介館, 京都.
石本君代・奥谷喬司. 2017. ニッポン貝人列伝. 時代をつくった貝コレクション. 78 pp. LIXIL出版, 東京.
岩下典弘(編). 1973. 江原真伍博士旧蔵貝類標本目録. 78 pp. 天理高等学校, 奈良.
金丸但馬. 1953a. 日本貝類学史(32). *Venus* 17(4): 223-230.
金丸但馬. 1953b. 日本貝類学会25年間の歩み. *Venus* 17(4): 230-235.
金丸但馬. 1957. 日本貝類学史(37). *Venus* 19(3・4): 268-272.
加藤延年. 1935. 博物室に籠りて. 所収 奥村龍三(編), 我等ノ同志社. 同志社創立六十周年記念誌, pp. 22-23. 同志社事業部, 京都.
川崎公美子. 2014. 同志社小学校の理科教育. 同経会報(137): 24-27.
吉良哲明. 1947. 貝類総覧の未調査中“調査完了”について. ゆめ蛤(10): 14-15.
黒田生 [徳米]. 1907. 山陰地方介類採集記(承前). 介類雑誌 1(8): 27-32.
黒住耐二(編). 2003. 多摩川水系の貝類から見た自然環境の現状把握と保全に関する研究. (財)とうきゅう環境浄化財団. 研究助成・学術研究 31(226): 1-242.
黒住耐二. 2014. 貝類遺体からみた沖繩諸島の環境変化と文化変化. 所収 高宮広土・新里貴之(編), 琉球先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究. 研究論文集, 第2集, 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷, pp. 55-70. 六一書房, 東京.
黒住耐二. 2021. 学校標本をどのように取り扱うべきなのか?—千葉県陸産中学校の貝類標本を例として—. 千葉県立中央博物館研究報告書 15(2): 129-137.
松本伸示・北浦隆生. 1999. 高校生物教育の歴史の変遷と問題点. 科学教育研究 23(3): 220-228.
岡本正豊・奥谷喬司. 1997. 貝の和名. みたまき 特別号, 95 pp. 相模貝類同好会, 神奈川.
尾崎 渉. 1993. 館蔵貝類標本について—市立函館博物館所蔵の貝類標本「高川コレクションを中心に」—. 市立函館博物館研究紀要(3): 33-48.
日本学術会議. 2017. 重要自然史標本としての「自然史財」の選定と登録. iv+19 pp. 日本学術会議基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同自然史財の保護と活用分科会.
椎名仙卓. 1989. 明治博物館事始め. 257 pp. 思文閣出版, 京都.
田原 久・蟹江康光. 1983. [無題]. 所収 前田和俊ほか, 横須賀市自然博物館所蔵平瀬貝類標本目録(1) 陸産貝類(1) オナジマイマイ科(有肺亜綱). 横須賀市博物館資料集(8): 60.
玉井誠子・N-cube編集部. 2016. 学校は、まるごと博物館! 同志社の「標本館」を探訪. N-cube 26: 5-7.
玉松公叙. 1968. 故加藤延年先生とコレクション—岩倉・同志社標本館について—. 同経会報(6): 22-25.
玉松公叙. 2014. 加藤コレクション. 同経会報(137): 48-49.
田邊利幸. 2015. 加藤コレクション. 同経会報(139): 49-50.
安田 正. 2011. 「平瀬標本」物語. 北海道大学総合博物館ボランティアニュース(22): 3-5.
和田秀寿. 2022. 平瀬貝類博物館. 所収 和田秀寿(編), 特別展図録 博覧—近代京都の集め見せる力— pp. 197-245, 249-250. 龍谷ミュージアム, 龍谷大学, 京都.

**Kato, Nobuto Shell Collection preserved
in Doshisha, Kyoto: its origin, change of
preservation and utility**

Taiji Kurozumi

Natural History Museum and Institute, Chiba
955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan
E-mail: t.krzm@pref.chiba.lg.jp

The Hirase Shell Collection was a foundation of Japanese malacology comprising material from throughout the Japanese Empire, including the Kuril, Japanese and Ryukyu Islands, the Korean Peninsula and Taiwan. Though hitherto little known, part of it survives as the Kato, Nobuto Shell Collection at Doshisha in Kyoto. In this paper, I describe its origin, history and present-day use.